

丸山眞男と加藤周一が卒業した東京帝国大学は、1886(明治19)年の帝国大学令にもとづいて設置された3年制の高等教育機関である帝国大学の一つ。帝国大学にも適用された1919(大正8)年施行の大学令によって「国家に須要なる學術の理論及応用を教授し並其の蘊奥を攻究する」ことが目的とされ、同時に分科大学制から学部制に移行した。帝国大学は最終的に東京、京都、東北、九州、北海道、京城(ソウル)、台北、大阪、名古屋の9校が置かれたが、京城と台北を除いて1949(昭和24)年に4年制の新制大学に移行した。1913(大正2)年から翌年にかけて京都帝国大学で発生した沢柳事件を機に教授会による自治が慣行として認められるようになったが、これは1933(昭和8)年の京大事件(瀧川事件)の過程で維持することが困難となり、その後、思想信条を理由に外部からの圧力によって教官が処分されるケースが東京帝国大学経済学部などで続発した。

帝国大学は基本的に高等学校卒業者の進学先だったが、定員割れが起きた場合は専門学校や高等師範学校の卒業者などにも門戸が開かれた。医学部をはじめとして志願者が定員を上回る学部では高等学校卒業者に対しても入学者選抜試験が行われ、不合格となり浪人した者は「白線浪人」と呼ばれた。尋常小学校入学以降に飛び級・飛び入学や留年・浪人をしなかった場合、帝国大学卒業時の年齢は戦後の新制大学卒業者より1歳上の23歳となる。1913年に東北帝国大学に3人の女子学生が入学して以降、一部の帝国大学はごく少数ながら女子学生を受け入れていた(すべての帝国大学に女子学生が入学できるようになったのは戦後の1946年)。当時は朝鮮や台湾といった「外地」を除き、20歳に達した男子には徴兵義務が課されていたが、帝国大学を含む高等教育機関在学者には在学中の徴集が26歳まで猶予される特

第5部 大学時代

権があった（ただし理工系と教員養成系を除いて1943年10月にこの猶予は停止され、いわゆる「学徒出陣」が行われた）。帝国大学は学歴社会の頂点を占めており、卒業者の就職先は官僚や大企業の職員、各種の専門職などが中心だったが、大学卒業者の増加や経済不況の影響によって就職難に見舞われた時期もあった（昭和初期など）。

東京帝国大学は1877(明治10年)に設立された東京大学の後身であり、所在地は東京市本郷区本富士町（現在の東京大学本郷キャンパス）。学部制がとられた際に法・文・経済・医・工・理・農学部が置かれ、1942(昭和17)年には千葉県千葉市に第二工学部が設けられた（1951年廃止）。